

■令和２年度第１回会津美里町観光まちづくり推進協議会議事録

日時：令和２年７月１６日（木）１４：００～

場所：会津美里役場２階 ２０６ 会議室

出席委員：石原直委員、水野俊彦委員、伊東広子委員、高梨宣浩委員、石田仁委員、
眞鍋大輝委員、小林章太郎委員、長谷川洋一委員、柴崎陽委員、竹内樹美委員、
長谷川祥子委員、渡部茂樹委員

事務局（産業振興課）：金子課長、小林課長補佐、小林係長、石黒主任主査

○委嘱状交付

１．開会

２．町長挨拶

ご承知のとおり、観光振興計画については策定から５年目に入り、最終年度となった。今後は後期計画としてさらに５年間の計画策定のためにご助言いただくが、この５年間で顧みて今後の計画策定をしていくことが今回の趣旨となる。

現在、新型コロナウイルスの流行に伴い、あやめ祭りやせと市などのイベントもすべて中止するなど、町も苦労している。お手元にご用意した新聞記事にもあるように、国はGoToキャンペーンを実施する予定だが厳しい状況にある。町も最高５千円の宿泊助成金を出すことを決定している。

ところで、町内中学校の修学旅行を実施することとした。行先はコロナ感染者のいない岩手県で、三陸方面を予定している。一方、新潟方面からは会津への修学旅行を受け入れる予定である。会津地方もコロナ感染者が出ていない。

現状のままでは町も立ち行かないため、経済活動の活性化、観光の活性化は重要な目標である。会議の中では忌憚ないご意見を頂き、より良い振興計画となるようお願いしたい。

３．委員紹介

４．委員長及び副委員長の選出

５．議事

（１）基本目標の達成状況

（２）施策に対する評価（令和元年度）

（事務局より資料説明）

< 委員長 >

今年から流行し出した新型コロナウイルスの影響は具体的にはどれほどあると見たらよいか。

< 事務局 >

ある宿泊施設を例に昨年と比較すると、平成 31 年 3 月では 570 件あった宿泊件数が令和元年 3 月では 230 件程度と約半数まで落ち込んでいる。

< 委員長 >

そのうち、観光客比率はどうか。例えば、宿泊施設を運営している委員のところはどのような状況か。

< 委員 >

数字では 95% 減少というひどい状況である。

< 委員長 >

冬は観光シーズンではないため、コロナの影響を抜きに観光という観点からみれば必ずしも悲惨な状態とは言い切れないので、切り分けて考える必要がある。また、日本全体で国内旅行は減少傾向にあるということも考慮すれば横ばいが悪い状況とは言えない。

これまで実施してきたことに効果があったのかどうか、この指標では因果関係を実証できないのが、難しいところである。

< 委員 >

ここでいう観光施設とはどこが含まれるのか。

< 事務局 >

物販施設では陶磁器会館、流紋焼、酔月窯、ふるさと観光物産館、ハッタンドウ、これらの 5 件を対象に調査した。宿泊施設については、ほっとぴあ、にんじん湯、花紋屋、会津野、吉田屋、こぶし荘の宿泊者数として、これらを合計した入込数としている。

< 委員 >

日帰りでは 747 円、宿泊では 1 万 132 円ということだが、宿泊は飲食代も含まれているのか。宿泊代のみか。

< 事務局 >

ほっとぴあに関しては、入込数と売上を確認しているが、それ以外の宿については、入込

数を確認し、これに基本的な主要商品の単価を乗じて算出している。

<委員長>

日帰りの消費額が少ない状態が続いていて、購買意欲につながっていないとのことだが、消費者の購買意欲を喚起するような施策はあったか。

<委員>

商品開発により消費を増やそうという努力はしている。また、新商品を開発している商店もあると思う。

ただ、注意が必要なのは、平成 30 年から令和元年にかけて消費税が 10%に増加しており、税抜きの売り上げはもっと低いと思われ、例えば日帰りの消費額はさらに、1 人あたり 20 円程度減少していると考えられる。増税は消費に大きく響いた。

また、1 万人で推移している宿泊客数について分析すると、国内旅行が頭打ちであることから、やはりインバウンドを伸ばさないことには増加は難しかったということが分かる。

昨年度は台風とコロナに加えて、増税や少雪など会津地方の観光は打撃が多きく、これが響いた。

<委員>

デジタル DMO が運営する VISIT AIZU の HP は参加市町村の観光情報を日本語以外の言語で紹介するものだが、会津美里町に関連する部分については、残念ながら 3 年前からデータ更新されていない。デジタル DMO が真の DMO 組織として地域マネジメントを行うことが理想であるが、そのような計画はあるのか。

<事務局>

デジタル DMO は通常の DMO と全く別物である。これは、国の地方創生推進交付金による 5 年間の事業で、情報発信やユーザーの情報収集、ユーザーに店舗予約等に利用しているもらうことを目的としている。本物の DMO 組織とは異なるものとしてご理解頂きたい。

<委員>

アクションプランで、DMO 組織を展開するという大きな目標があったと記憶しているが、それをデジタル DMO に任せるということではなく、他の形で推進していこうという方針に変わりはないのか。

<事務局>

現在、DMO 組織の設立に至っていないが、今後、段階を踏んで設立できたらと考えてい

る。

<委員長>

そもそも DMO というものは、農業やその加工、販売体制など既に成立しているものを観光という切り口でひとつにしていこうというものである。それぞれがあまり育っていないところに DMO を持ってきても、方向を合わせることはできるが、組織として育てることは難しい。ここにお集りの観光に関わる方々の方向性を合わせることで美里版 DMO ではないだろうか。加工から販売、エンターテインメントまでをつなげてひとつにするようなことを展開するには、まだ基盤が弱い。ただ、関係者をひとつの方向に向けていけば、そのような環境を作ることができるのではないか。

(3) 後期観光振興基本計画及び後期アクションプランについて

(位置づけについて事務局より説明)

(資料 1 について事務局より説明)

<委員長>

検討会の時期は終わっている。次のステップとして具体的なことを実施できないか。

<委員>

日帰り消費額は 1 時間で 1000 円と言われている。つまり会津美里町には 1 時間も滞在していないことになるため、1 時間滞在するような施策を考えていく必要がある。三十三観音のイベントを実施する際は(町長からの配布資料参照) 町外からの参加者を集めるために、町内 11 カ所の観音様を全てご開帳してほしい。

コロナ禍で具体的な施策を考えていくことはどの自治体でも難しいが、できる範囲で将来像の実現に向けて取り組むべき。例えば、農業中心の観光を掲げていることから、定期的かつ継続的に、門前町通り等で軽トラ市を開催してはどうか。農家や商店が自ら販売や出し物をする。維持管理費用もかからないし、自分たちでできることをする。今は遠方からの来町は難しいので、まず近隣から人を集めるべき。これにより消費額の増につながるのではないか。

<委員長>

観光によって地域にリターンがあるということを地域の方々に納得して頂くのは難しいものだが、今の話は分かりやすく、核になると感じた。このような具体的なゴールに対してどう情報発信するか、どう行政がサポートするかという話になると思う。

< 委員 >

移住者のフォローアップをしているが、フリーマーケットをしたいという声は多い。町有地や私有地、道路等を開放した市やフリーマーケットを継続的に行えば、町内外から人が集まり、エリアの価値を高めることにつながる。ストックではなくエリアに行ってみたいという志向が若い世代にはある。近日本郷にて窯元有志と実施するライトアップイベントは、焼き物のイベントではなく、焼き物のある本郷地域に来てもらうという趣旨で実施する。ターゲットは 40 代くらいまでの若い世代で、WEB で情報発信する。これまで、会津美里町には若い世代が買う商品がなく、来訪者は若松や道の駅で買い物することになる。これから町を担う若い世代を引き込まないと、10 年後が心配である。

空き家物件も町内では結構動きがある。また、首都圏からの移住希望者に観光レンタサイクルを案内したところ、乗って町をみてまわるだけでも楽しいとの意見だった。

< 委員長 >

委員会発足時からの課題である。今後は具体的な施策をするなかでこれらの課題を解決していく必要がある。

(資料 2、3 について事務局より説明)

< 委員 >

美辞麗句が並ぶが、実際できるか懐疑的である。観光振興にあたり、地元住民が好きなのところを見つけ、それを育てていけたらと思う。また、うまくいかなかったり、途中であきらめたりする場合もあるので、それはなぜできなかったのかを学ぶ必要がある。

会津美里町だけでなく、会津全体で考えないといけない。美里には大内宿や会津若松に向かう途中で立ち寄る人が多いので、ちょっと立ち寄ってもらう方法を見つける必要がある。また、観光とは何かをもう少し考える必要がある。

< 委員 >

コロナ禍で大勢が集まる状況をつくることは難しいため、裏路地を活用した街歩きを提案したい。街中に店舗・スポットを点在させ、街歩きと消費、まちの魅力を知る機会を兼ねることができると思う。

< 委員 >

これまではインバウンドもターゲットにしていたが、現在は難しいため、後 2 年ほどはターゲットを県内などに変更するなど、地元志向の取り組みができればいいと思う。また、地元の資源を動画にして YouTube で発信できると良いと思う。

< 委員 >

去年は雨が多く、全国的にぶどう栽培が難しく、製品化できたものが少なかったが、それが売り切れつつある状況である。現在は栽培に力を入れているが、今年は今のところ順調だが日照不足が心配である。コロナの影響は大きく、ワイナリーは開けているがレストランは休んでいた。ハットアンドウは未だに開けていない。今年は開ける予定はなく、今は我慢する時期なのかなと考えている。

新たに募集を開始した地域おこし協力隊は、旅行関係の人材を募集していると聞いているが、どのような状況が教えてほしい。

< 事務局 >

政策財政課で募集開始したばかりの地域おこし協力隊は、グリーンツーリズムとクラフトなど創作を含めた業務内容を想定している。現在 2 名ほど応募があるようだが、引き続き募集中で、審査はこれからである。

< 委員 >

コロナの影響で、地域おこし協力隊に応募する方も増えるのではないかなと思う。スキルのある方が入れば面白くなるだろうなと思う。また拠点となる場所がどうなるのかも気になるところだ。

< 事務局 >

詳細情報を次回までに確認しておく。

< 委員 >

軽トラ市 の話題に関連してだが、「あいづ朝市」を主催している委員がいるが、どのような内容か教えて頂きたい。

< 委員 >

有機農家が消費者とコミュニケーションを取りながら販売することを目的に 5 年前に始めた。会津全地域の農家が参加し、会津若松市内で開催している。おかげさまで、売り上げは伸びている。コロナで一時休んだが再開後も順調で、需要があると考えている。同様の取り組みが町内でもできればよいと思う。

観光事業は町の人と外から来る人がうまくやり合っ て初めて成果が出るものなので、町の人 の理解が とても大事だと思う。コロナ禍になって、観光が持続可能な事業なのか改めて問われている。町民の方々とうまくやるのが持続可能性の基本的なことなので、ここはまず町民に目を向けてほしい。持続可能な観光を見据えて、例えば、宿泊施設を災害時の避難所にするとか、タクシーを非難準備情報が発令された時に即座に避難所へ輸送する手段にす

るなど、いろんな価値があると思う。それぞれの価値を見直して、町民への価値提供をひとつの方向性として考えていければと思う。

< 委員 >

町おこしについて町内別組織でも検討している。ある一組織だけでは町おこしは進まないで、組織間で情報共有や連携を積極的に進めていければと思う。

< 委員 >

極上の会津プロジェクト協議会で昨年発行した三十三観音の会津遺産カードは 9 千枚以上出ており、会津地区以外の方でも希望する方が結構いる。今、コロナの状況で観光バス事業も打撃を受けているなか、打開策を探っているところだ。奈良の大仏が疫病対策で作られたように、日本人はこれまでも疫病を乗り越えてきた。そこで、会津若松市の宿泊補助金を利用した、疫病対策として観音様や薬師如来を巡る祈りの旅を企画したところである。これからは、知恵を出して、今までとは異なる企画を打っていかないと、なかなか観光客は見込めない。会津美里町の観音様は三十三観音の中でも特に素晴らしいものだと思うので、これを活かし、PR できればもう少し来て頂けるのではないかと。

< 委員長 >

観音様に疫病退散のお礼はあるのだろうか。

< 委員 >

町内の三十三観音は多くが無住職のため、すぐに御朱印を頂けるところが少ない。

私がお客様を三十三観音へご案内する時は最初に中田観音へ行き、寅さんの撮影の話をする。そういったところから案内しないとお客さんが食いついてこない。

< 委員長 >

寛永寺から疫病退散のお礼が送られてきた。こういったアイディアも活用できると思った。

< 委員 >

昨年、県内の鍾乳洞に行き、地元の方々と交流したが、その場で自分たちの商品も販売していて、買い物も楽しむことができた。自分たちも流紋焼の体験も合せたイベントでそれぞれの商店から出品するなどして楽しんだ。商品販売は工夫次第で様々な方法がある。また、個別の商店も売れる強みとなる商品を作らなければいけないと思う。

< 委員 >

観光協会としては県外の広域連携を進めてきたが、コロナで県外が難しいので、県内の交流を進めていきたい。現在県内で交流しているのは、那須、白河、下郷（大内宿）、喜多方だが、特に大内宿とは20年以上交流を続けており、大内宿に来て頂いた方に、こぶしラインを通して会津美里町に来て頂けるよう、提案していきたい。

着地型観光を考える際には、会津美里町だけでなく、近隣地域と連ねて考えていく必要がある。例えば、大内宿にはないが美里にあるもの（瀬戸物や三十三観音など）をアピールし、町内でお昼ご飯を食べて頂き、次へ周って頂くなど。やはり、観光では食の魅力は重要なので、美里町に行くと〇〇が美味しいというものがあればいいと思う。

観光協会として、年内に何回か観光事業者を集めて、要望をお聞きする予定で、新たな構想の中で進んでいきたいと考えている。

< 委員長 >

観光は地域の方々に自分たちのものと思ってもらえないことがよくある。観光の素晴らしさを話すと皆賛成するが、自分の生活圏に観光客が入ってくるのは良しと思わない人が多く、観光によるリターンは伝わりにくい。よって、美里町ではこういうことができますよと具体的に見せるのが一番の情報発信ではないだろうか。

課題の中でも、情報発信は要だと思うが、どのような情報を誰に発信するのが、今年すべき議論である。例えば、インバウンドといっても幅が広く、どの層に対して発信するのか、絞っていく必要がある。

< 委員 >

資料に書かれた課題について、ワーキングでは新しいことを拾うのではなく、どうしてここまでだったか、できなかったか、理由について深掘りする必要がある。おそらく役を担う人が少ないのだろうと思う。去年まではあらゆる面で復興特需のようなものだったが、去年あたりから陰りが見えて、震災前の状態になってきたと言える。

どういう役割を担った人がいて、なぜここまでしか出来なかったか、我々の応援が足りなかったかもしれないし、行政のサポートが必要だったかもしれない、声掛けが足りなかったかもしれない、そういうことを議論するべきだと思う。

その上で、今後5年間の計画では、コロナの影響は切ってもきれないと思われる。我々事業者としては、ブレーキとアクセルを同時に押さなければならないが、ブレーキが少しでも緩むと大変なことになる可能性があるという危うい状況の中で、数年間やらなければならない。これを前提に計画を立てるのか、収束する予定で計画を立てるのか、これによって、対象者も変われば、目標額も変わってくるので、前提を定める必要がある。

<委員長>

地区毎に観光資源は必要だが、地区毎に観光をやっては意味がない。また前に戻ってしまう。地区ごとではなく、美里全体としての観光まちづくりを検討していく必要がある。

コロナについては、関連する会議に多く出席して議論しているが、そこで皆言っているのは、本物は残るということ。今から準備すれば、コロナが落ち着く頃には我々の取り組んだ成果が活かせるのではないかと思う。インバウンドが急増したのは、日本が意図的に呼び込んだものではなく、アジアの経済が急成長したことによるもので、観光客バブルだったと言える。経済バブルの時と同様、今、バブルがはじけたので、その次には本物が残るはずだ。そのように考えて前に進めればと思う。

以上